

米海兵隊MQ-9の嘉手納飛行場への一時展開について

令和 6 年 8 月

防 衛 省

外 務 省

最近の我が国周辺海空域での各国等の動向

- 中国は、尖閣諸島周辺を含む東シナ海を中心に、我が国周辺海空域での活動を急速に拡大・活発化。一方的な活動のエスカレーションも。
- 北朝鮮は「瀬取り」を含む違法な海上での活動を継続。
- ロシアと中国は東シナ海等において爆撃機による共同飛行を実施。
⇒このような安全保障環境の中、情報収集能力のより一層の強化が必要です。

(直近の主な動向)

用例
航空機 →
艦艇 →



空母「遼寧」



太平洋上で空母「山東」から艦載戦闘機が飛行
(23年4月・9月・10～11月、
24年7月・8月)

太平洋上で空母「遼寧」から艦載戦闘機(推定含む)が飛行
(18年4月、20年4月、21年4月・
12月、22年5月・12月)



中国艦艇が尖閣諸島周辺で恒常的に活動

- 2023年3月末から4月初にかけて、過去最長となる80時間以上にわたって中国海警船が尖閣諸島周辺の領海に侵入



北朝鮮による「瀬取り」



21年～、中国無人機が沖縄・宮古島間を頻繁に通過
23年～、中国無人機が与那国島・台湾間を通過

日本における無人機

無人機は、人的損耗を局限しつつ、長期連続運用※が可能であり、情報収集等の手段として使用が一般化しています。

民間企業：吉岐での
飛行実証



ガーディアン
2018年5月

米軍：岩国への展開



MQ-4 トライトン
2022年7月～10月

自衛隊：三沢への
配備



**RQ-4 グローバル
ホーク**
2021年度以降順次配備

米軍：三沢への展開



MQ-4 トライトン
2021年5月～10月



RQ-4 グローバルホーク
2014年5月～10月
2015年7月～12月
2018年6月～10月

米軍：嘉手納への展開



MQ-4 トライトン
2024年5月～10月頃(予定)



MQ-9 (米空軍)
2023年11月～現在

MQ-9 (米海兵隊)
約1年間



米軍：横田への展開



RQ-4 グローバルホーク
2017年5月～10月
2019年8月～10月
2020年7月～9月
2021年5月～10月
2022年5月～10月
2023年5月～現在

海保：八戸への配備



MQ-9B シーガーディアン
2020年10月～11月 (飛行実証)
2022年10月～現在

米軍：鹿屋への展開



MQ-9 (米空軍)
2022年11月～2023年11月

※ 滞空時間 MQ-4 (無人機) : 約30時間
P-8、P-3 (有人機) : 約10時間

米海兵隊MQ-9の嘉手納飛行場への展開について

南西地域周辺での情報収集、警戒監視及び偵察（I S R活動）の一層の強化を図るため、約1年間、米海兵隊MQ-9（6機以下）の嘉手納飛行場への一時展開を予定しています。

- 令和5年11月に米空軍MQ-9を嘉手納飛行場に展開して以降も、わが国を取り巻く安全保障環境は厳しさを増す一方であり、これまで以上に日米のI S R能力を一層強化していくことが重要。本年7月の日米「2+2」においても、日米のI S Rにおける協力関係の一層の深化の必要性を確認。
- こうしたことを踏まえ、米海兵隊は、約1年間、MQ-9（6機以下）を一時的に展開させる予定。
- 米海兵隊MQ-9の嘉手納飛行場への展開により、
 - ・日本の南西地域周辺へのアクセスをより容易にし、同地域周辺でI S R活動を実施する時間を増加させること
 - ・同地域周辺における即時の情報収集ニーズに対応すること
 - ・複数の機体を、より近傍から連続的に運用することにより
周辺国の艦艇・船舶などの特異な行動を見逃さない態勢を取ることが、これまで以上に可能となる。
- 米海兵隊MQ-9と米空軍MQ-9は設計上、同一の機体であり、性能に差異はない。また、嘉手納飛行場に一時展開される米海兵隊MQ-9は、米空軍MQ-9と同様、情報収集用の仕様であり、弾薬を搭載して運用をする計画はなく、非武装。
- 米海兵隊は、米空軍と同様、安全対策、飛行経路、駐機場、騒音規制措置に関して、米空軍と同様に対応し、地元へ配慮しつつ、運用する考え。
- なお、本年5月から嘉手納飛行場に一時展開中のトライトン（MQ-4）については、本年10月頃（予定）に、グアムへ撤収する見込み。



尖閣諸島（沖縄県石垣市）



砲のようなものを搭載した
領海侵入を繰り返す中国の海警船舶

米軍MQ-9と日米共同情報分析組織について

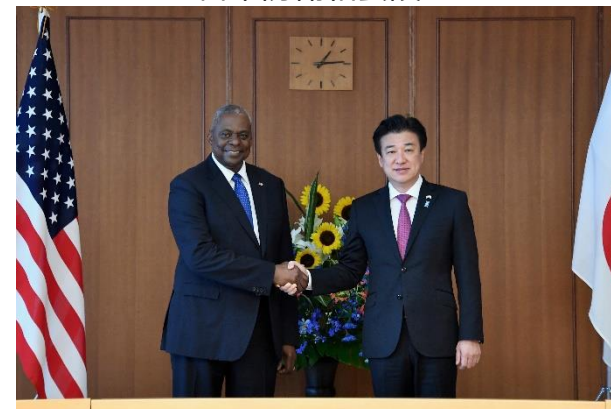
米軍MQ-9は、情報収集、警戒監視及び偵察（ISR）能力の強化に大きな役割を果たしており、収集した情報は日米で共同して分析しています。

- 2022年11月から、海自鹿屋航空基地に一時展開している米空軍MQ-9が、海上での情報収集・警戒監視活動を実施。
- また、横田基地に「日米共同情報分析組織（Bilateral Information Analysis Cell : B I A C）」を設置し、MQ-9が収集した情報の共同分析を実施
- これにより、防衛省・自衛隊もMQ-9が収集した情報を活用できるようになり、現在、MQ-9は、我が国防衛においても重要な役割を果たしている
- 2024年7月に実施された日米防衛相会談においても、B I A Cが、日米同盟の情報収集、警戒監視及び偵察（ISR）能力の強化に大きな役割を果たしていることを確認
- 今般、一時展開される米海兵隊のMQ-9が収集した情報についてもB I A Cにおける分析の対象とする方向で調整中

日米共同情報分析組織 運用開始式典



日米防衛相会談



MQ-9の情報収集能力

MQ-9は、洋上の艦艇・船舶等の活動を高性能センサーで把握する高い能力を有しています。

MQ-9の能力

※ 公開情報に基づくもの

- 光学センサーや赤外線センサーに加え、昼夜問わず、また悪天候においても観測可能な合成開口レーダーなどの各種高性能センサーを搭載
- これらのセンサーにより、夜間も含め、広範囲な海域における艦艇・船舶の所在を把握でき、また、乗員の甲板上での行動といった、不審な艦艇・船舶の活動内容の把握が可能
- 滞空時間：32時間



高性能センサーによって、精度の高い情報を取得
MQ-9が収集できる情報の一例（出典：General Atomics社HP）

MQ-9の概要

MQ-9は、世界各国で安定的に運用されております。

- 情報収集などの多目的で世界各国で運用される無人機

- 米空軍は300機近くのMQ-9を安定的に運用
- その他、英空軍、仏空軍、伊空軍等が導入
- NASAが地球科学調査目的で運用した実績あり



- F-15戦闘機、KC-135等と比べ、軽量、小型で騒音が小さい
- 滞空時間が32時間と長いため、頻繁な離着陸が不要

MQ-9の安全性・騒音

MQ-9は、高い安全性を有しているとともに、騒音は小型機と同程度となっています。

- MQ-9は安全を確保するため、複数の飛行制御システムを保持
(仮に一つのシステムが不調でも、残りのシステムによって航空機の制御が可能)
- 米海兵隊・米空軍のMQ-9の事故・事案に伴う死傷者はこれまでなし
- MQ-9は、旅客機と同様に、航空管制に従って飛行するなど、十分な安全確保のための措置を講じる
- MQ-9の騒音は、セスナ172と同程度
(MQ-9の離陸時の騒音は、約120m上空を飛行している時に、地上での騒音は最大75dB程度 (街路沿いの住宅街と同等程度))
- 嘉手納飛行場で運用しているKC-135や戦闘機 (F-15) と比較し、騒音は小さい

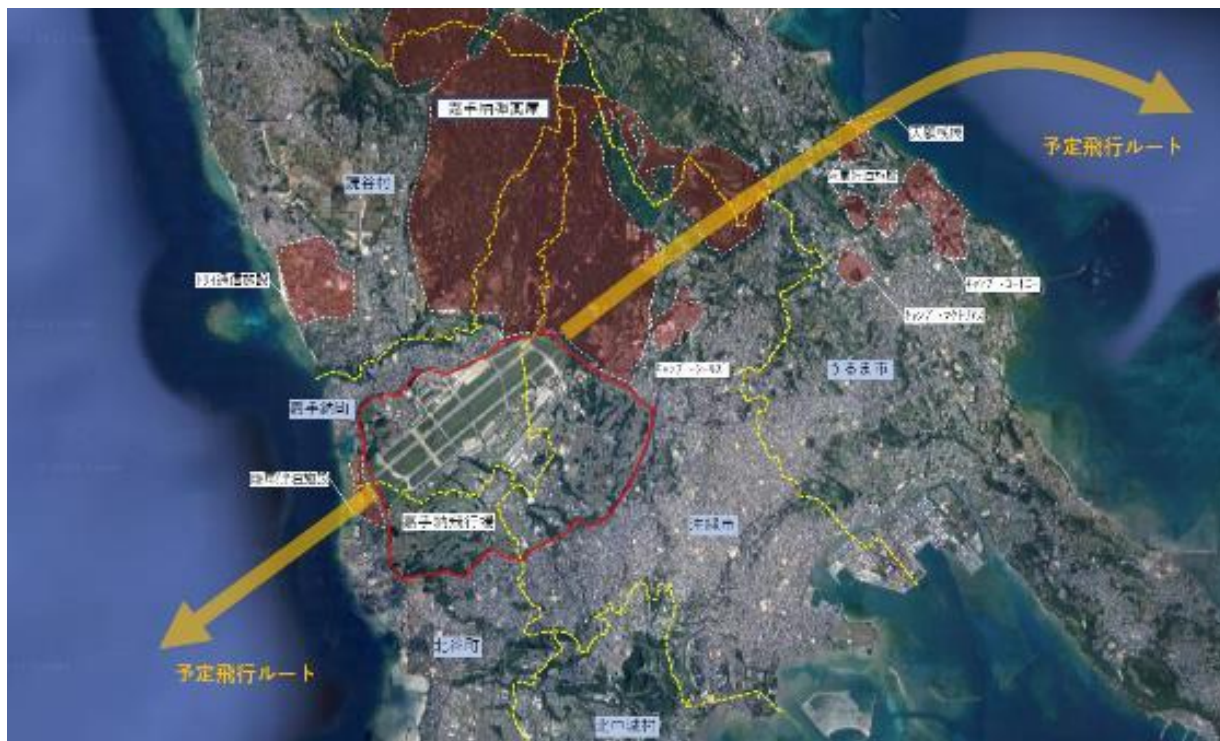


セスナ172 (出典：Textron Aviation社HP)

米海兵隊MQ-9の飛行経路と駐機場所について

米海兵隊MQ-9は、既に配備されている米空軍MQ-9と同様に、離陸後、最短距離で洋上へ飛行し、着陸時も同様の経路を飛行することとしており、住宅密集地域上空を極力回避することとしています。

また、駐機場所は、近隣住宅地から相当離れた場所に計画されています。



任務の特性上、夜間、早朝の運用も想定されますが、
離着陸回数は、非常に限定的です

MQ-9と他の航空機との比較

F-15



KC-135



MQ-9



機種名	F-15	KC-135	MQ-9
全幅	約13m	約40m	約20m
全長	約19m	約42m	約11m
全高	約6m	約13m	約4m
最大離陸重量	約31t	約146t	約5t
運用速度	約3,000km/h	約930km/h	約330km/h
航続距離	約5,700km	約18,000km	約8,500km
滞空時間	約5時間	約20時間	約30時間
運用高度	～約19,800m	～約15,000m	～約15,200m
離陸時騒 (dB)	109dB	86dB	75dB
初飛行	1975年	1956年	2001年

資料源 : Jane's Unmanned Aerial Vehicles and Targets Issue37、米空軍FACTSHEET、General Atomics Aeronautical System社パンフレット、Northrop Grumman社パンフレット、FAA Advisory Circular 36-3H 05/25/2012 等

無人機のサイズ比較

